

さくらと扇
掌編

神家正成

※ この冊子に収録されている掌編は、『さくらと扇』読後に、お楽しみください。

桃の想い



客間と奥御殿をつなげる廊下の灯りが、風に揺らいだ。

奥御殿の入り口に座していた西の局は、半ば閉じかけていた目を強く見開き、立ち上がる。胸元の固いふくらみに右手を当てながら、眠気を覚ますために息を大きく吸う。

まだ暑さの残る文月の夜ふけの闇に、ろうそくの匂いが漂っている。

小柄な男の影がこちらに向かってくる。付き従っている能面のような顔の男の手燭が、小さな男の金色の胸服を照らす。

西の局は小袖の襟と裾をそろえて、板の間に片膝を立てて座り、こうべを下げる。にぎやかな足音が迫り、目の前で止まる。

「大儀である」 関白——豊田秀吉のねっとりとした声が降ってきた。頭をさらに垂れると、「下がってよい」と続いた。

西の局は唾を呑み込み、拳を握る。

「恐れながら姫御前様は、お休みになっておられます。どうかお引き取りを……」

「これ上臈、無礼であるぞ」 石田三成のかん高い叱責に、西の局はあごを引く。

「無礼とは、これは異なることを……。ここから先は坂東を総べる古河公方の寝所にてござりまする。ご用があるのなら陽が出てからお越しくださいませ」

「春の夜の 闇はあやなし 梅の花 色こそ見えね 香やは隠るる——。まあ今は夏の夜じやが、お西や、お主も分かるであろう……。今宵は梅の香の御所殿と二人きりでゆつくりと、その坂東の今後のことを話そうというのじや」秀吉の艶のある笑い声でした。西の局は、美しい髪の姫様——氏姫の花盛りのさくららのような笑顔を思い浮かべる。ここが切所だ。胸元にもう一度右手を当てる時、顔を上げた。

「お覚悟は、ございますか」

秀吉の笑い顔が消えた。三成はあからさまに顔をしかめた。

「室町の世を起こした尊氏公から続く源氏の棟梁の血脈、それを綿々と受け継いで護ってきた時の流れの重みは、決して軽いものではないと、ございませぬ」

「田舎公方が、寝ぼけたことを言うなっ」三成の毒づいた声が返ってくる。

秀吉は黄金の扇子を上帯から抜き出し、左の手のひらに何度も打ち付ける。

西の局は、思案顔の秀吉を強く見据えて口を開いた。

「世の中に たえて桜の なかりせば 春の心は のどけからまし……。姫御前様は梅ではなく、坂東の荒武者どもが仰ぎ見るさくらでございませぬ。みやびな京と違い、猛き武士は、さくらを手折る者がおれば、その名に懸けてあらがうことでしよう」

秀吉は眼を見開いたのちに糸のように細め、なめるようににらんでくる。

ろうそくの匂いが鼻を衝く。覚悟は、できている——。

やがて秀吉は片方の唇の端を上げると、一歩こちらに進みきた。

西の局はぐつと奥歯をかむ。秀吉の手が胸に伸びてきた。避けようと体をひねるが、小袖の胸元を強い力でつかまれ、引き寄せられる。

はだけた胸元から、隠していた懐剣が、あらわになった。

三成が懐剣を奪い取ろうと手を伸ばすが、その手を秀吉の金の扇子が遮った。

氏姫の緋色の護り刀より淡く薄く桃色の懐剣を、秀吉は黙って見つめている。

いざというときはこの懐剣で——と思っていたが、体が動かない。

「お主は小田原——北条から来た者と聞いておったが、違うのか」

小田原から付き従った浄光院——氏姫の母が、姫を産んだときの笑顔が思い浮かぶ。

「私が侍り護るのは北条でも足利でもなく、ただ姫御前様のみでございませぬ……」

「ふむ」秀吉の金の扇子が首元に当てられる。西の局は観念して目を閉じた。

「別れをば 山の桜に まかせてむ 留めむ留めじは 花のまにまに——か。まあ、お主はさくらというよりは、桃じやな。桃の薫りがする」秀吉の笑い声が廊下に響く。

「坂東の武士は腰抜けばかりと思っておったが、いやはや女子の中にも武士がおったとは、これはまた面白い。古河のさくらを護り育てたのが、小田原の桃であったとはのう……。お西や、ここはお主に免じて手を引こう」

西の局は目を大きく見開いた。秀吉の童のような笑顔が見えた。

「坂東は、さくらと桃に任せたまえ」

秀吉の声に西の局は平伏する。その頬を夜風が優しくなでた。

杞の国の人



天はいつか崩れ落ちてくる——。幼い頃、そう信じていた。

おそらく小さい頃に見た大嵐と雷いかづちの恐ろしい思い出が、胸に強く焼き付いているからであろう。育つにつれ、さすがにそのことを口に出すことはなくなったが、常に何かに追われ、心配することが癖になってしまっていた。

奈菜なななは、久しぶりに天が崩れ落ちる夢を見た。目を開けるが、相変わらず薄暗い闇の底にいる。数日前にはうつすらと見えていた天井のはりが、もう見えない。緩やかに息を吐こうとするが、乾ききった喉はむせて、せきしか出てこない。

「お奈菜や……。お奈菜っ」

ああ、姫様の声が聞こえる。珠よりも愛らしい嶋姫しまひめに侍ることになってからは、天ではなく、姫様に何かあつては……と常に心を砕くようになった。

思えば姫様の道のりは、つらく哀しいものであった。安房で生まれ育ち、下野のお殿様に嫁いだものの別れ、太閤殿下に再び嫁ぎまた別れ、戦の世の荒波にもまれた姫様は、辛さであつたのであろうか……。大きな争いがようやく収まり、江戸の市ヶ谷にある平安寺のそばに居を構えたのち、ときおり姫様の心のふるさどである喜連川や、共に歩む女子おんなこのいる東慶寺に出掛けるなどして共に過すごした十数年は、穏やかな日々であった。

「これっ、お奈菜や、気を確かに保つてのじゃ」

右の手のひらが包まれ、じんわりと温かくなる。横たえた体には力が入らず、声もない。姫様の声に顔を何とか向けるが、すてにめしい目に、私の光であり天であった姫様の顔はもう見えない……。

ああ、それでも私には、あの日の衣川の風さみがわに吹かれた美しい髪や、強い想いを秘めたまなざし、包み込むような優しいほほ笑み、燃えさかる大坂城の炎に照らされ朱く染まった頬を、ありありと思いつくことができます。

姫様のお子を抱きかかえることができなかったのは無念ですが、それ以上に天を愛し、尊く大切な想いを胸にいだかれた姫様を、私は何よりも誇らしく思います。

すすり泣く声が聞こえる。姫様は私のために泣いてくださるのですね……。でも姫様に泣き顔は似合いません。花盛りのさくらのごとき笑い顔こそ、姫様にはふさわしいのです。もうそれを見ることができぬのが、唯一の心残りでございます……。

「お奈菜や、まだゆくのは早いぞ」

左の手のひらが力強く握られる。ああ弥右衛門殿……。あなたは私と同じでしたね。

姫様に侍り、共に生きてくださって、本当にありがとうございます。多くの者を失った姫様でしたが、あなたのはにかむような笑い顔にだけ励まされたでしょうか……。

あなたも私と同じく「忠」に生きられたのです。私はもう先立ちますが、どうか姫様をゆくゆくもお護りくださいませ。お頼み申し上げます……。

天からまばゆい光が射し込み、私を包んだ。

「お奈菜や、今までご苦労であった」殿——惟久殿これひさの優しい声が聞こえる。光の中にさつきに乗る惟久が現れた。いなくなさつきさつきの傍らには、ちよこんと座る金色のきつねも見える。これがあの世であろうか。いよいよ私もこれまでなのだろう……。

「もう思い残すことはないか」

「ありません……」

私は胸に手を当てる。今まで歩んできた生涯が連なりながら思い浮かんでくる。

ああ、最後に——。

「いや……一つだけ……」

光の中の惟久がほほ笑む。惟久の周りから、あふれんばかりの美しい七色の光がはじけ出す。まるで天が崩れ落ちたようだ。あまりの明るさに強く目を閉じる。

やがて光が去り、私は目を開けた。

「お奈菜やっ、お奈菜っ」

姫様のくしゃくしゃな泣き顔が飛び込んできた。

「ひ……姫様に、泣き顔は、似合いませんねぞ……」私は唇の両端を何とか上げる。

嶋姫が泣いたような笑ったような顔になる。弥右衛門の驚きの声が聞こえた。

花盛りのさくらのような嶋姫の顔を、私は目に焼き付ける。

ああ、姫様、奈菜は幸せでございました——。

縁を切る寺



門前が、騒がしい。

尼僧に呼ばれ、私は色とりどりの紫陽花が咲く花の庭から、鎌倉街道に面する総門に急ぐ。総門を見おろす山門に立つと、石段の下には人だかりができていた。

その真中に、騎乗した武士と数人の従者の姿が見える。男は旗本であろうか、無紋の布衣姿だ。男が手に持つ手綱や鞍の下に垂れる障泥は、鮮やかな朱色だ。

門前の御用宿の主人らと、押し問答をしているのか、怒鳴り声が聞こえる。私は手にした数珠を握り直すと、階段をゆっくりと下り始めた。

幾人かが、白い尼頭巾と墨染めの法衣姿の私を見つけ、頭を下げてくる。気付いた周りの者たちも、こうべを垂れる。

男はこちらを向くと敵を見つけたかのように目をつり上げ、にらんできた。階段を下りきった私に、男は咆哮した。

「お主が東慶寺住持の天秀尼か、我が妻を返せっ」

男は馬を進めてくる。高ぶった馬が眼前まで迫り、いなくな。宿の主人が、小走りて駆け寄ってきてささやく。

「数日前に駆け込んできた女性の夫です」

私はうなずいて静かに息を吐く。東慶寺は縁切りの寺法を持つ女人救済の駆け込み寺だ。女の体を改めた尼僧の言葉を思い出す。

——体中、赤黒いあざや傷などで、目も当てられぬありさまでした。

男は私を一瞥すると、供の者どもにあごで指示を出す。徒の足軽どもが周りを囲む。幾人かが石段を登り、山門に向かおうとする。

「無礼者、山門より先は、男どもは禁制であるぞっ」

腹の底から出した声に、足軽の足が止まる。馬上の男は顔を引きつらせる。

「ふん、おとなしくあやつを差し出せば、辛気臭い尼寺になど入らぬわ。今すぐ、ここに連れてこい。半刻だけ待ってやろう。早うせい」

宿の主人や、周りの尼僧が不安げな顔で、こちらを見つめてくる。

「鎌倉の世から続き、権現様御声掛かりの縁切りの寺法を知らぬのか」

「何をぬかすかっ。女三界に家なし。夫に従わぬ女など、この世にあつてはならぬ」

男は吐き捨てるど強引に山門に進もうとする。その前をふさぐように私は立つ。

「ならば、私を斬り捨てて進みなさい。天に刃向かう覚悟があれば——。大坂で一度は捨てたこの命、惜しくはありません」

供の者が男に耳打ちをする。男の顔がみるみると驚愕の色に染まり始める。

私の父は大坂城と運命を共にした豊臣秀頼であり、養母は先の將軍である徳川秀忠の娘である天寿院——千姫である。

やがて男は舌打ちをすると、いまいましそうに馬首を街道に戻し、去ってゆく。

本堂に戻る道の途中、紫陽花の陰から二人の女が顔を出し、私に頭を下げた。蒼い顔の一人は、先ほどの男の妻で、夏の日輪のような笑顔の一人は、三年ほど前にこの寺に駆け込んできた女だ。無事、夫との縁が切れ、新しい夫に来月嫁ぐと聞いている。

供の尼僧が呟く。「見事なお覚悟でした。我らは縁を切るにより多くの女子を救っているのですね……。女子の力を受けた当山で修行できることを誇りに思います」

私は尼僧にほほ笑み返す。天とは何かを教えてくれた嶋姫を始めとした多くの姉たちと、それを支えた喜連川などの男たちを思い出す。

「そうですね……ただ女子の力のみではなく、それを大切に思う殿方の想いも受けているからこそ、当山は護られているのです。私の愛しい方々が、それを教えてくださいました。その想いを伝えてゆくことこそが、大事なことなのです……」鮮やかな紫陽花が、夏の陽を受けて輝いている。「それに、我々は縁を切っているではありません」

私の声に尼僧は首をかしげる。

「縁を切るのではなく、悪縁を切り、新たな縁を結ぶのが、当山の天命なのです」

尼僧は、はじけたようにうなずいた。

懐かしく優しい嶋姫の声が、天から降ってくる。

——人は一人では生きていけない。天とは何かのために共に生きる世界なのです。見上げた皐月の空は、雲一つなく澄み切っていた。

神家正成 (かみや まさなり)

※本書の感想、著者への励ましなどは、下記ウェブサイトやTwitter、Facebook、noteまでお気軽にどうぞ。

<https://kamiya-masanari.com/>

https://twitter.com/Kamiya_Masanari

<https://www.facebook.com/Kamiya.Masanari>

https://note.mu/kamiya_masanari

さくらと扇 ^{おぼろ} ^{しやうへん} 掌編

2020年 2月29日 第1刷発行

著 者：神家正成

発行人：神家正成

発行所：株式会社神家正成

組 版：株式会社神家正成

印刷・製本：神家正成株式会社

本書の無断転載・複製はご自由にどうぞ。喜びます。
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

© Kamiya Masanari 2020 Printed in Japan

ISBN 978-4-69-865026-6



現代を舞台にした自衛隊ミステリー植木シリーズ3作も宝島社文庫から好評発売中です。

『[深山の桜](#)』(2014年2月。アフリカ南スーダンで国際連合平和維持活動中の自衛隊宿営地)と『[七四](#)』(2015年3月。静岡県の富士学校と東京)、『[桜と日章](#)』(2017年4月。千葉県柏市)。

それぞれ独立した物語の緩いシリーズです。どれから読んでても楽しめます。

戦前外地の甲子園と朝鮮人特攻隊を題材に、国境を越える熱い友情を描いた

『[赤い白球](#)』(双葉社。1936年～1945年。朝鮮の平壤や京城、東京、ビルマ、フィリピン、知覧など) も好評発売中です。

全作品が同一の世界観の物語で、幾人か連なる登場人物が出てきます。

